LES

LE PAPIER D'UN

QUI VOTE POUR QUI?

OBSERVATEUR

先ずは自己紹介から

誰が誰を

源氏鶏太

私にはかまわないで

私にはかまわないで

一九七五年五月三十日　初版発行
一九七七年一二月二六日　六版発行

定価　八八〇円

著者　源氏鶏太

発行者　堀内末男

発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ッ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一
出版部　(〇三)二二三〇―六三六一
販売部　(〇三)二二三〇―六一七一

印刷所　中央精版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたします

©1975　K. GENJI

0093―772003―3041

目次

第一章　昼と夜と――――――――五
第二章　雲の乱れ――――――――八七
第三章　風の行方――――――――一三八
第四章　鏡の中の街――――――――一九二
第五章　雨の日・風の日――――――――二四七
第六章　愛ということ――――――――二九九

装丁　佐野繁次郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

私にはかまわないで

第一章　昼と夜と

一

総務課長の山内は、お願いいたします、といって書類をテーブルの上の未決函の中に置いて帰りかけた北沢志奈子の顔を何気なく見上げて、

（おや？）

と、いう表情になった。

いい直すと、毎日見ていた北沢志奈子が、いつの間に、こんな一人前の娘らしくなっていたのだという新鮮なおどろきであった。ついでにいえば、この娘は、こんなに美しかったのかと、あらためて中年男のよごれた眼の垢を洗い落される思いであった。しかも、志奈子の美しさには清らかさが漂うていた。

（すくなくともこの娘だけは、まだ男の肌を知っていないに違いない）

山内課長がそのように断言したくなったについては、つい最近、にがい経験をしていることが原因になっていた。

山内課長は、自分でも決して品行方正だとは思っていなかった。仕事は、まあ出来る方のつもりだが、そのかわり適当にバーの女やなんかと浮気をしている。男は、それでいいのだし、そうあるべきなのだと思っていた。ただし、それには一つの条件がある。即ち、女房にバレるようなヘマだけは絶対にしないことだ。女房にさえバレなかったらいくら浮気をしても、浮気をしたことにならないという理屈であった。この理屈には、いくつかの矛盾があることはわかっているが、しかし、その矛盾を敢て無視することは、中年男が愉しく生きていくために必要な人生の知恵なのだ、と思うことに決めていた。

およそ一週間前のことである。山内課長は、銀座のバーが終ってから、そこの女を誘って、渋谷裏のホテルへ行った。いや、ホテルへ入ろうとしたところが、事が終ってホテルから出てくる二人連れのあることに気がついた。こういう姿は、あんまり他人に見られたくないし、見せたくもない。そこで山内課長は、女の手を引っ張って、あわてて物蔭にかくれた。そこで向うの二人をやり過すつもりであった。しかし、ただやり過すのでなく、いったいどういう連中だろうかと見ておきたくなるのが人情であったろう。

事の終った二人は、ひっそりとして山内課長の前を通り過ぎて行った。男は、三十五、六歳のサラリーマン風である。そして、女は、二十二、三歳のOL風であって、そこまではまことに月並であったのだが、しかし、山内課長が、思わず、

(あ)

と、いいたくなったのは、そのOL風が自分の部下の吉村明子にまぎれもないと知ったからであった。

信じ難いことであった。吉村明子の平常からして、そういうことをしているとは想像もつかなかった。あくまで真面目なOLと思い込んでいた。

「どうなさったの?」

女は、山内課長の顔を見ながらいった。

「あの女は、僕の部下なんだよ。」

山内課長は、唸るようにいった。

二

「あら、そうだったの。」

女は、ちょっとおどろいたらしいのだが、

「でも、よかったじゃァないの?」

と、慰めるようにいった。

「よかった?」

山内課長は、聞き咎めた。

「だって、こっちの方に気がつかれなくって。」

「ああ、そういう意味だったのか。」

「それとも課長さんは、こんなところを部下に見られても平気? そういう太っ腹な課長さん?」

「冗談じゃァない。僕は、こう見えてもいたって気のちいさい方の課長さんだ。」

「あたしも前からそう思っていたわ。」

「有りがとう。しかし……。」

「何?」

「まさか、あの女がああいうことをしていようとは思っていなかった。」

「要するに課長さんの認識不足というところね。」

「認識不足?」

「近頃、OLさんたちの素行がどんなに乱れているか、一般の常識になっている筈でしょう? 水商売のあたしたち以上だそうよ。」

「しかし、僕は、そんなことはジャーナリストたちが売らんがため面白半分に、無責任に、大袈裟に書き散らしているだけだと思っていたのだ。」

「ああ、お気の毒な課長さん。」

「僕は、明日からあの女を見て困ると思うんだ。」
「困るって？」
「今夜のことを思い出してだ。」
「まさか意見する気ではないんでしょう？」
「こっちのことを考えれば、出来る筈がなかろう？」
「ねえ、意見するかわりにホテルへためしにお誘いになってみたら？　案外、すうっとついてくるかも知れないわよ、あの女なら。得をするわ。」
「よしてくれ。僕には自分の会社の女に手を出すような悪趣味はないのだ。」
「あら、ご立派。」
女は、ちょっと冷やかすようにいったことで、その話題は打ち切られた。しかし、その夜の山内課長の男の意気は、あんまり上らなかった。吉村明子を見たショックのせいだったかも知れない。やはり気のちいさい課長さんのようだ。ために女からいささか軽蔑の眼で眺められた。
しかし、翌日、明子は、当然のことながらまことに何食わぬ顔で、颯爽としていた。どう見ても一見処女風であった。あんな妻子のあるらしい男とあんなホテルへ気軽に出入りしている女だとは思えなかった。山内課長は、暗がりからであったし、自分の見間違いであったのかも、と思いかけていた。しかし、その気になって仔細に眺めれば、明子は、処女にしてはやはりどこかおかしなところがあるようだった。たとえば、歩くときの腰の振り方やなんかにも……。猥褻な何かを連想させるようであった。
（こうなると、うちの課のどんな女も信用してはならないのでは……）
山内課長がそんな弱気になりかけていたやさきに、北沢志奈子を見て、まぎれもなく匂うような処女だと思ったのであった。

三

志奈子の方でも山内課長の表情の変化に気がついたようだ。帰りかけて、
（何か……）
と、いいたがっているようであった。
そうなると山内課長の方でも、
「ちょっと……。」
と、いいたくなってくる。
ついでに思いついたことは、自分がかねてから志奈子の家庭のことを気にしていたことであった。山内課長は、方針として、部下の家庭の問題には積極的にタッチしないことにしていた。頼まれたり、相談されたりすれば別である

が、そこはあくまでドライにと割り切ることにしていた。だから吉村明子の問題にしたところで放ってある。あんなことでは将来困るのでないかと思うのだが、だからといってそれとなく注意してやるのは、課長の出しゃばりのような気がしていた。一つには、山内課長自身にもいささか後暗いところのあるせいもあるが。

しかし、山内課長は、以前から志奈子の場合だけは別だ、と思うことにしていた。といって、平常の志奈子は、人の同情を引くようなめそめそした女であるというのではなかった。むしろ、その逆といってよかったろう。一口にいえば、闊達に振る舞っていた。仕事への責任感も能力も申し分がなかった。男の社員の間だけでなしに、女の社員の間でも人気がある筈なのだ。志奈子がそういう娘であればこそ、山内課長は、何んとかいい結婚をさせてやりたいと思って来たのかも知れない。出来たら自分が理想の男性を探して来てやってもいいとも。もっとも今の世に理想の男性なんて、そうやたらにいるものでないことを、男である山内課長は、誰よりもよく知っている筈だった。

「今、忙しいのかね。」

山内課長は、笑顔でいった。

「そんなことはございません。」

志奈子は、つられたような笑顔でいったのだが、山内課長にはそれがいよいよ美しく見えてくるのであった。

(こんな娘と結婚した男は、きっと仕合わせになれるだろう)

山内課長は、うかつにもそう思ったくらいであった。

しかし、山内課長は、どんな女だって、いったん結婚したらとたんに変るものだということを経験で知っている筈であった。そのことは夫婦喧嘩をしてみると、いちばんよくわかる。女にはどうにも救いようのない理不尽なところがある。夫婦喧嘩の最中の女房は、気違い同然だというのは、かねてからの山内課長の持論であった。だから眼の前の志奈子だって、やがて結婚して、当然の如く夫婦喧嘩をした場合、気違い同然の女に変ることには間違いあるまい。今の志奈子には想像も出来ないことであるが、しかし、女とはそういうふうに出来ている。山内課長は、密かに溜息を洩らしたくなっていた。

四

「そこに腰を降さないかね。」

「はい。」

「入社してから何年になった?」

「二年半になります。」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「そうか、二年半になるか、もう。」
「何か？」
「いや、すると、いくつになった？」
「……。」
「女性に年齢を訊くのは失礼だったのかな。」
「そんなことはございません。二十三歳になりました。」
「まさに結婚適齢期ということだな。」
「さァ……。」
志奈子は、曖昧な微笑を洩らした。そのことは自分で結婚適齢期であることを認めたようでもあるし、そんなことは別に思っていないといいたがっているようでもあった。
「よけいなことを訊くようだが、結婚したいと思っている男性がいるのかね。」
「ございません。」
志奈子は、キッパリといった。
「その年で？」
山内課長は、わざとあきれたようにいったのだが、しかし、心の中で何んとなくほっとしていた。もし、ございます、といわれたら却って狼狽したかも知れなかろう。
「おかしいでしょうか、課長さん。」
「いやいや。」
山内課長は、あわてて否定しておいて、
「ところでお祖父さんは、お元気かね。」
「はい。お蔭さまで。」
「よかった。もうおいくつになられた？」
「七十三歳です。」
「そうか、七十三歳におなりになったのか。」
山内課長は、感慨深げにいった。
山内課長が、志奈子の祖父偉一郎に初めて会ったのは、志奈子が入社して間もなくであった。ちょっと会社の前を通ったので、ということであった。山内課長は、偉一郎を一目見ただけで、ただの人物でない、と思った。聞いてみると、その前年までN車輛専務取締役をしていたのだということであった。恐らく在任中は、相当恐れられていたに違いなかろう。しかし、志奈子のことに関しては、眼の中に入れても痛くないようであった。
「実は、可哀そうな孫でしてな。」
「と、おっしゃいますと？」
「父親には早く亡くなられて、母親は、再婚したのです。」
「そうでしたか。」
「だから私は、今、志奈子と二人だけで暮しているのです。」
「二人だけ？」
「いや、他に古くからいるお手伝いがいてくれるのでたす

かっているのですが。」
「それにしてもお祖父さんとお孫さんだけというのはお淋しいでしょうな。」
「淋しいです。本当に淋しいです。」
偉一郎は、いかにも淋しいという顔で、
「だからいっそう志奈子がふびんなのです。」

五

「わかります。よくわかります。しかし、志奈子さんには、そういう暗さのようなものはすこしも感じられません。」
「そういって貰えると有りがたいのです。私もかねてからそのことを最も気にしていたのです。家にいても、志奈子は、自分の母親のこと口にすることはめったにありません。忘れたのか、思い出すまいと努力しているのかわかりませんが。」
「志奈子さんのお母さんが再婚なさったのは、志奈子さんのおいくつのときなんですか。」
「十歳のときです。」
「十歳……。」
「父親が亡くなって三年目でした。」
「……。」
「初めのうちは、志奈子のために一生を後家で通すと殊勝なことをいっていたのです。そうはいってもまだ若いのですし、私たちは無理でないかと思っていたのですが、しかし、志奈子のためにはその方がいいに決っていますし、私たちもその気でいたのです。」
「……。」
「しかし、二年目ぐらいから外出が多くなりますし、お化粧が派手になってくる。どうもおかしいと思っているうちに、いろいろの理屈をつけて外泊してくるようになりました。」
「……。」
「そうなると私たちとしましても放っておく訳にいかないので問い詰めたところ、男が出来ていたのです。」
「……。」
「そんなに好きになってしまったのなら結婚させてやってもいいと、私がその男に会ったのです。」
「……。」
「ところがどうにもいけません。まともな男ではないのです。何かのセールスマンをやっているといっているのですが、要するに、定職のないような男なのです。」
「……。」

「だけでなしに顔に卑しさの出ている男でした。私たちは、一目で反対しました。」
「……。」
「すくなくとも志奈子の父親として認める訳にはいかないといったのです。」
「……。」
「だから私たちは最後にいったのです、志奈子を選ぶか、その男を選ぶか、どっちかにすることだ、と。」
「……。」
「女は、いろいろと迷うていたようですが、結局、男を選んでしまいました。」
「……。」
「全くバカな女でした。」
「……。」
「当時の金で二百万円を渡し、以後、一切の縁を絶つという一札を入れて、家から出て貰いました。」
「……。」
「その後、消息も絶えたままなんですよ、志奈子を産んだ母親は。」
偉一郎の眼のあたりがうっすらとにじんでいるようであった。

六

そうなると山内課長も返答に窮するばかりであった。世間にあり勝ちな話であるが、現実に自分の部下の身の上に関することだと思うと、気持が沈んでくるようであった。まして偉一郎ほどの人物が涙ぐんでいるのである。しかし、会社における志奈子からそういう暗さのようなものが微塵も感じられないことも事実であった。我慢しているのか、あきらめ切ってしまっているのか、どっちかであろう。しかし、いくらあきらめ切っているのだとしても、志奈子にとって、これからが今まで以上に母親が恋しく、必要になってくるのではあるまいか。そういう年齢なのだ。
「私が今最も恐れているのは。」
しばらくたって偉一郎がいった。
「恐れているとおっしゃると？」
山内課長は、訊き返した。偉一郎の眼は、もう濡れていなかった。逆に一種の光を帯びて来ているようであった。
「そのうちに志奈子の母親が姿を現すことです。」
「しかし、今後、一切の縁を絶つという一札が入っているのでしょう？」
「さよう。だが、そんな約束なんか平気で破る女のような

気がしているのです。」
「……。」
「あの女は、その後、うまくいっていればいっているで、悪くなっていればなっているで、いずれにしても年頃になった志奈子に会いたくなるに違いないと思うのです。」
「あり得ることですね。」
「でしょう？　私は、そのことの志奈子にあたえる影響が恐いのです。」
「よくわかります。」
「あげく、志奈子をあの女に奪われるようなことがあったら私は、あの女を殺して、自分も死んでしまうかも知れません。」
　偉一郎は、本気でそんなことを考えているようだ。山内課長には、そんな偉一郎が無気味に見えるだけであった。同時に、偉一郎が志奈子をどんなに愛しているか、そして、どんなにたよりにしているか、わかるような気がしていた。勿論、偉一郎のいい分の中には、純粋な愛情の名のもとに多分にエゴがまじっているとしても、山内課長はそれを責める気になれなかった。今日まで苦労して志奈子を育てて来たのだと思えば、当然のことだといいたかった。
　しかし、偉一郎は、急に醒めたように、
「どうも失礼。」
「とんでもない。」
「実は、今日は、こんなことまでいう気はなかったのです。ただ、志奈子をよろしく、というだけのつもりだったのです。が、あなたとお会いしているうちに、ついいう気になってしまったのです。」
「いいえ、私は、お聞きしておいてよかったと思っております。」
「有りがとう。そういって貰えると私も気持が安まります。そこで折入ってのお願いなのですが。」
「お願いとおっしゃいますと？」

七

「今後、それとなく志奈子の身辺に注意していて頂きたいのです。」
「わかりました。」
「あの娘が急にはしゃぎ出したり、あるいは妙にふさぎ込んだりするようになったらおしえて頂きたいのです。その原因の一つに母親の出現ということが考えられるからです。」
「十分注意しておきます。」

偉一郎は、一応ほっとしたような顔で帰って行った。
山内課長は、当座の間は、妙な下駄を預けられたような気がして、それとなく志奈子への注意を怠らないで来たつもりであった。しかし、志奈子は、日日に闊達に過しているし、いつとはなしに殆んど忘れかけていた。が、今日になって、志奈子がびっくりするような美しい娘になっていることに気がついたのであった。以前からそうなっていたのに、山内課長は、うかつにも見過していたのかも知れない。しかし、娘が恋愛をすると急に美しくなるともいわれている。だから志奈子もそうなのかも知れない。が、すくなくとも志奈子の変化は、偉一郎が最も恐れていた母親のことには関係がなさそうであった。そして、偉一郎自身、それ以来、山内課長の前に姿を現していなかった。そのことで山内課長は、多少無責任でないかといいたい気持がないでなかったが、しかし、あのとき偉一郎に感じた好意のようなものは、今も失っていないつもりであった。
「あたし、いちいちいいませんでしたけど、祖父もときどき課長さんのことをお元気でいられるかといっております。」
「そうか、それは嬉しい。どうかよろしくいっておいて貰いたい。」
「有りがとうございます。祖父もきっと喜ぶと思います。」
「一度お会いしたきりだが、いいお祖父さんだ。」
「はい。」
「君だって、そう思っているのだろう?」
「はい。」
「あのお祖父さんに心配をかけるようなことをしてはいけないよ。」
この際、山内課長としては、志奈子を捨てた母親のことを思い切って口にしたかったのだが、しかし、それは知らぬことになっているのであった。
「でも、課長さん。」
「何?」
「近頃、祖父は、ちょっとおかしいのです。」
「おかしいとは?」
「よくわからないんですけど、目下恋愛中のような気がするのです。」
「目下恋愛中だって?」
「それを妙にあたしに隠したがったりして。やっぱりおかしいでしょう?」
しかし、それをいう志奈子の口調は、怨んだり、咎めたりしているのではなさそうであった。むしろ微笑ましがっているようであった。しかし、山内課長にとって、七十三歳で目下恋愛中は、たしかにショックであった。

八

しかし、よく考えてみれば、今頃、七十三歳の男が目下恋愛中は、別にショックを受けるほどの大問題ではない筈なのだ。世間にありふれているといってもいいし、また、そのことが周囲に大きな迷惑を及ぼすのでなかったら実に喜ぶべきことである。現に孫である志奈子が、

（祖父の恋愛……）

として微笑ましがっているのだ。

しかし、山内課長には二年前に志奈子のことを思って、うっすらと眼に涙をにじませていた偉一郎の姿を思い浮かべると、やはりどうにも信じられぬ気がしてくるのであった。裏切られたような気がしてくるのであった。山内課長は、偉一郎に古武士の面影を感じていた。最早、色恋に関係のない人物だと思い込んでいた。そして、偉一郎が今も一途に志奈子を可愛く、ふびんだと思っているのならいい年をして恋愛どころではない筈だといいたいのであった。

しかし、そんなことを偉一郎にいったら、

（よけいなことだ。放っておいて貰いましょう）

と、いわれそうである。

「たしかにちょっとおかしいようだな。」

「でしょう？」

「しかし、君の思い違いということもある。」

「いいえ。」

「どうして、いいえだなんていえるんだね。」

「だって、あたし、見たんですもの。」

「見た？」

「祖父が五十過ぎの、とってもふっくらとしたいい感じの女の人と嬉しそうに銀座を歩いているところを。」

「いつ頃？」

「一ヵ月くらい前、夜の銀座で。」

山内課長は、それを聞いたとき、もしかしたらその女は、志奈子の母親でないか、と閃めくように思った。しかし、それなら志奈子にわかる筈だし、また、あんなに憎んでいた女と、偉一郎がそんなに嬉しそうに銀座を歩いていたりすることは考えられない。やはり、別人だと思っておいてよさそうである。

「君は、声をかけなかったのか。」

「何んだか悪いような気がして。」

「別に悪くもなかろう？　もし、その人が君の思っているようなお祖父さんの恋人であったのならお祖父さんは、喜んで君に紹介したかも知れないよ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com